タイトル：Recurrent Stroke Incidence and Etiology in Patients with Embolic Stroke of Undetermined Source and Other Stroke Subtypes

掲載雑誌　Journal of Atherosclerosis and Thrombosis (IF 3.876)

著者：Sono Toi, Yuka Shirai, Kentaro Ishizuka, Megumi Hosoya, Misa Seki, Eiko Higuchi, Takao Hoshino, Kazuo Kitagawa,

背景：近年の報告では塞栓源不明の脳梗塞（ESUS）の慢性期での脳卒中再発は4.0%以上だが、ESUSとその他の脳卒中病型の臨床転帰を急性期および慢性期で比較した研究はほとんどない。
目的：急性期および慢性期外来でのESUSと他病型での脳卒中再発およびその病型、予後、新規心房細動検出を明らかにする。
方法：2015年3月から2019年8月の期間に、発症後7日以内の急性脳梗塞にて当科に入院した前向きコホート研究登録患者を対象とした。入院中、脳卒中再発、臨床症状の悪化ならびに発作性心房細動 (PAF) の新規発症を退院まで追跡した。退院後外来受診した患者391例を本研究に再登録し、2020年8月まで追跡した。
結果：急性期入院中の各病型の再発率は　ESUS, CE, LAA. SVDが各々7.6%, 8.1%, 18.8%, 2.2%でありLAAの再発リスクが最も高く、ESUSとCEは同程度であった（図１）。外来患者での年間脳卒中再発率は各病型とも3-6%で同程度であったが、再発脳卒中の病型ではESUSでは19例中6例、SVDでは5例中2例が出血性脳卒中であり、この両群はCE, LAAに比し出血リスクが有意に高かった（図２）。
結論：入院中の脳卒中再発リスクは、LAAが最も高くESUS, CEは同程度　SVDが最も少なかった。外来通院患者では各病型の年間再発リスクは3-6%で差がなかったが、ESUSおよびSVDでは出血性脳卒中発症りクスが高いと考えられ、脳出血予防に留意すべきと考えられる。

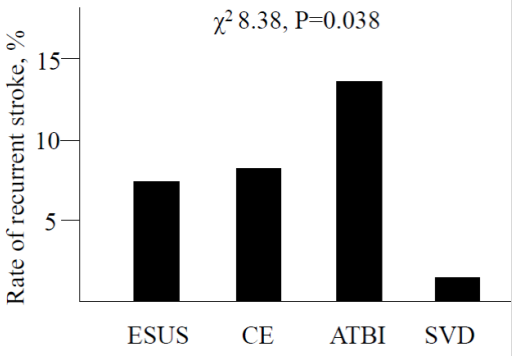

図１

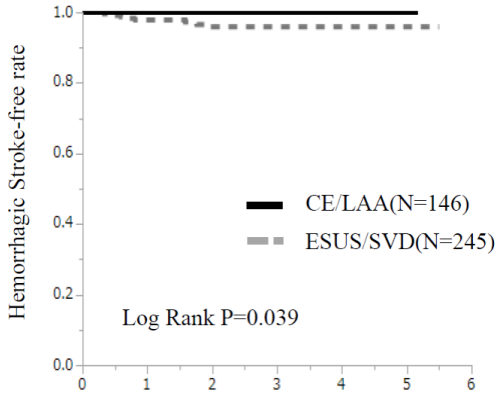

図２